様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００９７２

研究課題名（和文）江戸南部近郊地帯の分節構造―荏原郡六郷領を事例に

研究課題名（英文）Rokugouryou-the southern suburbs of Edo: A Segmental Analysis

研究代表者
吉田　伸之（Yoshida, Nobuyuki）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・名誉教授

研究者番号：４００９２３７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、巨大城下町江戸の南部近郊にある六郷領（現・東京都大田区南半）を対象とし、近世後期から初期近代の地帯構造の特質を解明しようと試みたもので、以下のような研究成果を得た。①大田区立郷土博物館所蔵六郷領八幡塚村筏屋鈴木家文書の再調査を実施し現状記録を完成させた。②同館所蔵の未整理文書、六郷領鵜ノ木村（大田区鵜の木）天明家文書の概要調査に着手した。②多摩川河口汽水域の社会構造の特質を、羽田猟師町に注目し、漁業や筏宿、また舟運などに注目し論点を抽出した。③都公文書館所蔵「鉄道一件」を素材に明治３～4年における新橋-横浜間鉄道の敷設が、六郷領を含む地帯にどのような変容を強いたかを検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は、第1に、江戸南部近郊地帯の広域な社会結合（領）を包括的に把握し、これを地帯構造と呼び、その社会=空間構造を、構成する諸要素の分節的な複合として捉える（分節構造）方法の有効性・重要性を、研究実践的に提示したことにある。また第２に、当該域の海面秩序や、多摩川河口域の社会構造、さらには内陸部に成熟する近世的な諸要素が、新橋-横浜間鉄道に具現される近代化の急速な進展により、いかに破壊され、また新たな構造へと定位したか実証的に見通すという方法の提起にある。これらを大田区立郷土博物館の諸事業と連接させることで、現代の大田区地域市民へとその成果を共有することに社会的意義を見出している。

研究成果の概要（英文）：This study targeted the Rokugo territory in the southern suburbs of the huge castle town of Edo, and attempted to elucidate the characteristics of the zone structure from the late modern period to the early modern, and obtained the following research results. (1) We conducted a re-investigation of the documents of the Ikadaya Suzuki family of Hachimanzuka Village in the collection of the Ota City Folk Museum, and completed the current status record. (2) We have begun an overview survey of the unsorted documents, the Tenmyou family documents of Unoki Village, Rokugo Territory. (2) The characteristics of the social structure of the brackish waters of the Tama River estuary were extracted by focusing on Haneda and fisheries, raft lodgings, and boat transportation. (3) Using the "Railway Case" held by the Tokyo Metropolitan Archives, we examined how the construction of the Shimbashi-Yokohama Railway in Meiji 3~4 forced the transformation of the area including the Rokugo territory.

研究分野：日本近世史

キーワード：江戸近郊　分節構造　地帯構造　海面利用秩序　新橋-横浜間鉄道　六郷領　筏宿　多摩川河口汽水域

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の申請に至る背景には、2013～2015 年度基盤研究(C)「近世品川宿村の分節的な社会=空間構造に関する基盤的研究」(「前研究」Ⅰ)、2016~2018 年度基盤研究(C)「巨大城下町江戸近郊の分節的な地帯構造と民衆世界」(「前研究」Ⅱ）において、主に武蔵国荏原郡品川領を中心に調査・研究を試みたことがある。そこでの成果と課題を継承し、近年、ほとんど停滞状況にある大田区域の歴史研究を活性化させることをも念頭に置き、荏原郡域南半の六郷領を対象として、その地帯構造研究の前提となる史料所在状況の確認や論点摘出を主題として新たに課題設定したものである。これらにより、江戸南郊の社会=空間構造研究の基盤を構築しようと試みた。

２．研究の目的

近世の荏原郡六郷領は、東海道と多摩川（六郷川）がクロスする地点にあたる八幡塚村を中心として、34 ヶ村から構成された。その多くは幕領であるが、寺社領や旗本知行所も一部に含み、六郷用水を軸とする農業生産地帯を形成した。本研究では、この六郷領を一個の地帯として把握し、その存立構造の特質を、江戸内湾や多摩川との関わり、東海道やいくつかの脇往還による水陸の交通体系、対岸の橘樹郡川崎領との関わりなどについて、これらを拘束する巨大城下町江戸との関係構造に注目して、社会=空間構造の分節的な特質を解明し、全体史として再構築しようとするものである。

３．研究の方法

研究の方法枠組として、六郷領の地帯構造論、社会=空間構造の分節的把握、モノの生産・流通・消費過程の全局面を扱う全体史の視点、などを重視した。また、六郷領を特質付ける、臨海部村々における海面利用と秩序、品川宿－川崎宿を媒介する交通システムやその担い手、多摩川河口域における舟運の特質、などを具体的な検討課題として取り組んだ。

４．研究成果

(1) 史料所在状況の確認と史料調査

本研究においては、主に大田区立郷土博物館所蔵史料を中心に、荏原郡六郷領関係史料の所在状況確認や、その再調査、一部未整理文書の調査準備などを実施した。その主な内容は以下の様である。

八幡塚村筏屋鈴木家文書

同文書は、すでに『大田区史・資料編　諸家文書４』(1993 年）において「鈴木家文書」としてその多くが翻刻史料として掲載されている。しかし、郷土博物館における原文書の整理状況は混乱しており、また目録は同文書「写真帳」に収録された史料に関するもので、また目録記載の内容にも不備があった。また史料群の一部には未整理の部分も少なからず存在した。同文書は、旧八幡塚村の有力な筏宿経営の家に関するもので、また貴重な村絵図関係史料も含まれるなど、極めて重要な内容を有す。そこで今回は、原文書の整理を最初からやり直し、精緻な史料目録を作成した。そして目録をデータ化し、同博物館にも提供することで、同文書の保存や公開、また基礎研究のための基盤を構築した。なお、同史料群とともに、同村・丸太屋鈴木家文書（慶応大学所蔵。『大田区史・資料編　諸家文書４』に収録）が重要であるが、これについての史料原本確認などの作業は未着手である。

下沼部村北川家文書

下沼部村は、主要な脇往還である中原海道と多摩川が交差する位置にある。同村の名主家である北川家の遺された文書は希有な史料群であり、すでに大半が『大田区史・資料編　北川家文書１～4』(1984 年～1987 年）で翻刻・紹介されているが、これが原文書のどの程度に相当するか再確認が必要であり、また史料目録もきわめて不備である。再整理に向けての準備作業を兼ねて、同文書全体のデジタル撮影を業者に委託している。原文書が相当量に及ぶため、本研究の期間内ではまだ一部の撮影に留まり、今後の継続課題とした。

鵜ノ木村天明家文書

本研究の最終段階で、大田区立郷土博物館に寄託される未整理文書・鵜ノ木村天明（てんみょう）家文書の所在を確認した。鵜ノ木村は下沼部村と下丸子村の中間に位置する多摩川沿いの村であり、同村に５つある天明家の一つ天明茂光家に遺された当史料群は、かつて 1960 年ごろ工学院大学により建物調査が、また 1961 年には東京都教育委員会による概容調査が行われた。その後、1977～79 年には大田区教育委員会による所在調査が実施され、部分的に目録が作成されるなどしたが、その後は本格的な調査は行われず、2013 年に同館に寄託され未整理のまま現在に至る。本研究では、近世後期から近現代にかけての、多摩川河畔の社会構造の推移を見る上で、すでに知られている下丸子村平川家文書(『大田区史・資料編　平川家文書１～5』(1975 年～1979 年）や前掲・下沼部村北川家文書などとともに、最重要な史料群であると予想される天明家文書について、取り敢えず伝存した経緯の概要調査を施した。また、コロナ・パンディミックによる制約を受ける中で、約 10 名からなる調査グループを組織するなど、ようやく本格的な調査の開

始にむけて体制を整えた。

(2) 海苔をめぐる海面利用秩序と臨海地帯

本研究における主要な研究成果の第一は、六郷領も含む当該域の臨海地帯とそれらが対面する海面利用秩序の解明である。論文「巨大城下町近郊地帯の海面秩序」（吉田伸之編『シリーズ三都・江戸巻』2019 年 6 月）は、吉田「海辺の近代化―江戸（東京）近郊地帯を事例として」（ダニエル・V・ボツマン、塚田孝・吉田編『「明治 150 年」で考える―近代移行期の社会と空間』2018 年）の続編である。ここでは臨海部村落（磯付村々）において、海産物、特に海苔における生産や流通関係をめぐり、どのような利権関係が生じ、これを基礎に、いかなる海面利用秩序が形成されたかを、大森・羽田・品川を素材に検討した。生産局面においては、海苔場所（海苔養殖に用いる簀の設置範囲）が利権の基礎となり、主に 19 世紀前半における三大森村と糀谷村との争論、三大森村・糀谷村と羽田村・同猟師町との争論、などを解析した。また三大森村内の海苔場所をめぐる相剋にも注目し、村内の小名（小集落）を枠とする途子とよばれる海苔稼ぎの者の地縁的な結合を見出した。そして幕府への御膳海苔を扱う海苔御用達であった浅草の海苔問屋・永楽屋が、大森から品川一帯の生海苔の取引や「製方人」による加工などに対し、資金面からこれらを編成するヘゲモニーの担い手であったことを見通した。これらは江戸南郊臨海部の社会構造分析の一環であり、江戸内湾の海面秩序から、荏原郡六郷領の臨海地帯の社会や空間の特質に迫ろうとしたものである。

(3)芝浦―品川の社会=空間構造と鉄道

次いで、第二の成果は、論文「芝浦・高輪海岸の地帯構造と鉄道一件」（『都市史研究』9 号、2022 年 3 月）での、新橋―横浜間鉄道と主に芝・高輪海岸における地帯構造の変容の解明である。この論文は、2021 年 11 月にオンラインで開催された都市史学会・2021 年度大会での報告を文章化したものである。ここでは、東京都公文書館所蔵「鉄道一件」明治３・４年を基礎史料とし、当時最先端の交通インフラである鉄道が、日本で最初に明治３年に起工され短期間で完成する過程で、旧来の伝統社会、就中江戸と近郊の社会=空間構造がどのような破壊的変容を強いられたかを、芝浦から品川ステーションにいたる海面築堤の建設に注目して検討した。芝浦では多くの藩邸とともに一部町屋も撤去を強いられ、まだ残存した芝浦の漁業社会や雑魚場の魚市場をめぐる社会構造などは壊滅的な打撃を受けた。また海面築堤の建設により、高輪の海岸部インフラや風光明媚な江戸名所の一つ袖ケ浦の景観は一挙に喪われた。こうして強引に建設された鉄道を現代都市インフラの先駆と見て、ここに伝統社会の解体の始まりを見るとともに、新たに生まれる近代的な社会関係の芽生えにも注目した。これらは「前研究」Ⅰ・Ⅱ以来取り組んできた主題であるとともに、六郷領をも貫通する鉄道と当該域の社会変容との関わりを見る上でも重要な前提を獲得することができた。

(4) 多摩川汽水域の社会=空間構造

第三の成果は、講演「多摩川汽水域と大田区の近世―六郷領八幡塚村の社会と空間」（2020 年 2 月　大田区立郷土博物館）で取り上げた六郷領八幡塚村の基礎研究である。八幡塚村は、東海道が多摩川を渡る位置にあり、その南端川端には六郷渡場がある。その地帯特性を、まず数多く残される絵図史料から読み説きながら、主に東海道沿いに街村として展開する集落、周囲の村々と入り組む耕地と六郷用水の末端流路、多摩川の河原部分の状況、などを検討した。また筏屋鈴木家文書・丸太屋鈴木家文書を素材に、同村に分布する三軒の筏宿の経営、産地山方である三田領 42 村・小宮領 12 村の筏師との関係、八幡塚での筏宿による「筏直し」（材木の送付先に筏荷を整える作業）の様相、江戸の材木問屋との取引や争論などを検討した。また、六郷渡場と六郷立場（六郷川端）に注目し、東海道の陸上交通に対して八幡塚村がどのような役割を果たしたかを、水主、駄賃稼ぎや駕籠舁などに注目しながら検討した。この内、六郷立場を拠点の一つとする駕籠舁については論文「駕籠舁」（前掲『シリーズ三都・江戸巻』）で、片棒駕籠舁仲間を取り上げてその性格を論じた。また、講演「無宿源次郎と品川宿村―江戸の周縁社会に生きる」（2020 年 1 月　品川宿史談会講演会）において、品川とその周辺社会における逸脱的な社会層に注目し、六郷領をも包摂する江戸近郊の社会における「日用」層の分布とその特質について見通しを述べた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 吉田伸之	４．巻 19
２．論文標題 延宝二年、堀家飯田藩の足軽・小人	５．発行年 2021年
３．雑誌名 飯田市歴史研究所年報	６．最初と最後の頁 18-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田伸之	４．巻 19
２．論文標題 山口啓二「1939年夏　満洲旅行記」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 飯田市歴史研究所年報	６．最初と最後の頁 183-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田伸之	４．巻 1
２．論文標題 元結=商品をめぐる争論と社会	５．発行年 2020年
３．雑誌名 飯田市歴史研究所「調査・研究フォーラム」	６．最初と最後の頁 2-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田伸之	４．巻 32
２．論文標題 能真坊野と平川村	５．発行年 2019年
３．雑誌名 千葉いまむかし	６．最初と最後の頁 13-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 吉田伸之
2．発表標題 芝浦・高輪海岸の地帯構造と鉄道一件
3．学会等名 都市史学会
4．発表年 2021年

〔図書〕　計3件

1．著者名 飯田市歴史研究所	4．発行年 2022年
2．出版社 飯田市歴史研究所	5．総ページ数 263
3．書名 延宝二年　飯田御用覚書	

1．著者名 吉田伸之・森下徹	4．発行年 2020年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 164
3．書名 全体史へ《山口啓二の仕事》	

1．著者名 吉田伸之編	4．発行年 2019年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 331
3．書名 シリーズ三都　江戸巻	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関